

平成22年度研究助成事業報告

平成22年度京友会研究助成対象者に対する助成期間は平成23年5月31日をもって終了した。6月30日までに、5名全員について報告書を受領した。希望者には報告要旨をコピーしてお渡しする。なお研究費に関する会計報告については、1人10万円の研究費の実施内訳及び領収書を受け取り、事務局で確認を行った。

平成22年度 京友会助成対象者

2010年6月15日 助成委員 小林哲郎・楠見 孝

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
久野 和子	D3	国際研究集会	生涯教育学	川崎良孝	「第三の場」としての学校図書館
谷田 勇樹	M2	国際研究集会	教育認知心理学	齊藤智	Effects of accent typicality and phonotactic frequency on nonword immediate serial recall performance in Japanese
白戸 健一郎	M2	研究	生涯教育学	佐藤卓巳	満州電信電話株式会社における放送文化政策の実践とその継承
中山 真孝	M2	研究	教育認知心理学	齊藤智	言語と行為の模倣における意味の役割について
富松 良介	M2	研究	心理臨床学	大山泰宏	虐待アセスメントとしての風景構成法に関する縦断的研究—3年後の再調査から捉えた子どもの心理的回復と描画上の変化の関連

平成23年度 京友会助成委員会選考結果

審査委員の川村覚昭先生と西平直先生により、京友会2011年度研究助成金の審査が行われた。応募は12件あり、審査の結果8件が採択された。審査においてはこれまでの研究成果や継続性を踏まえ、問題意識や研究計画が精査され、その妥当性や発展性から採択が決定された。

平成23年度 京友会助成対象者

2011年6月21日 助成委員 川村覚昭・西平 直

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教官名	研究課題
古見文一	M2	研究集会	教育認知心理学	子安増生	Does experience with role play active mindreading in a perspective-taking task?
山本一成	D1	研究集会	臨床教育学	矢野智司	①親が保育に参画することで生じる保育環境についての考察 ②The transformation process of mother's distress-Through the experience of daily
小山内秀和	D1	研究	教育認知心理学	楠見孝	物語理解に伴う主観的体験の個人差に関する研究
荻原祐二	M2	研究	教育認知心理学	楠見孝	日本の「個人主義」は幸福感を低下させるか? : 対人関係からの検討
羽山裕子	D1	研究	教育方法学	田中耕治	アメリカ合衆国における学習障害児教育の意義と課題
田村徳子	D1	研究	比較教育政策学	杉本均	マイノリティの学力向上における保護者とコミュニティの学校参加の役割—米国ラティノに対する教育改善プログラムに着目して—
関口洋平	M2	研究	比較教育政策学	南部広孝	ベトナムにおける高等教育ガバナンス改革
西浦太郎	D2	研究	心理臨床学	桑原知子	東日本大震災にて被災した子どもへの心理臨床的関わりに関する研究

平成22年度 同窓会国際賞の選考結果

国際賞の受賞対象となった李 芝映（イ・チオン）氏の論文は、関連の資料・文献がよく読み込まれており、重厚な論文である。「日用」の解釈についての伊藤仁斎・浅見綱齋・貝原益軒の相違を明らかにし、綱齋と益軒が仁斎を批判したものの、このことが「日用」言説の同一地平に3者が関係性をもって位置づけられることになったことを論証したユニークな論文であり、国際賞にふさわしいと評価された。

2011年6月7日 審査委員 小島 勝・南部 広孝

氏名	学年	論文題目
李 芝映	D1	「近世前期京都の言説空間—浅見綱齋・貝原益軒の伊藤仁斎批判を通じて」

平成 22 年度助成事業助成対象者報告

久野 和子

世界的規模で様々な情報のデジタル化、ネットワーク化が 1990 年代後半から急速に進展し始め、図書館は、その本質的機能と役割について厳しい見直しと検討が迫られています。特にアメリカ図書館界では「access vs. holdings (アクセスか、所蔵か)」という議論が盛んに行われるようになり、その中で、デジタルライブラリに対抗する理論武装の枠組みとして、「場としての図書館」(the library as place) という考え方が注目されています。私は、その研究方法と成果を日本の学校図書館にあてはめ、独自に考察を行っています。学校図書館についての研究は、これまで「情報」、「教育」、「学習」を中心的課題としていましたが、さらに視野を広げ、学校図書館という場における子どもたちの実際の生活や活動に着目し、レイ・オールデンバーグの「第三の場」という概念にもとづいて検証を行いました。インタビューや自然観察などの調査結果を通して、学校図書館は、多様な出会い、友人たちとの社交の場、大人との接触などを提供してくれる安全で質の高い「第三の場」としても機能することができ、デジタル社会に生きる生徒の情報リテラシーの育成のみならず、それを支える健全な心身の発育や社会性の発達にも貢献できることを示しました。それは、「情報」、「教育」、「学習」といった学校図書館本来の機能を、社会的に、健全に、効果的に発揮させる基盤ともなるのです。

2010 年 8 月に中国で第 5 回上海 (杭州) 国際図書館フォーラムという国際会議が、「都市の生活と図書館サービス」(City Life and Library Service) というテーマで開催されました。その中の「図書館とコミュニティの福祉」(libraries and Community Well-Being) というセッションで、私は、「第三の場としての学校図書館」(School Libraries as the Third Place) と題した発表を行いました。アメリカ、ヨーロッパ、アジアの各国における高位の図書館役職者が発表者、参加者の多数を占める中で、大学院の一学生に過ぎない私が英語で発表を行うのは相当な勇気が必要でした。パワーポイントがうまく動かなかったりというトラブルも多少ありましたが、発表の後、何人もの方々からとても面白かった、興味深かったというお褒めの言葉をいただきました。私の研究はまだ理論的には未熟とは思いますが、国は違っても同じ司書、同じ図書館学研究者同士、熱意や関心は共通するものがあるということを実感でき、本当に嬉しかったです。また、少しながらも図書館学に貢献できた、認められたという感触を直に得ることができ、研究者として大きな励みになりました(発表は会議のプロシーディングにも論文として掲載されました)。このような貴重な経験をもつことができたのは、国際会議に参加、発表、そして色々な研究者や司書と直接交流できたお陰だと思っています。この国際会議への出席を可能してくれた京友会に心から感謝したいと思います。

谷田 勇樹

私は言語を実現するメカニズムについて、特に記憶の観点から研究しています。言語と記憶は一見関係ないように思われるでしょうが、音声の認識には記憶的現象が必要です。例えば「リンゴ」という単語を聞いて認識するには、「ゴ」の音が聞こえた時、以前に聞こえた「リン」を忘れてしまっただけなら「ゴ」という音しか認識できません。つまり我々は流れてくる音声を短い期間ではあるが保持しながら聞くという、ある種の記憶を使って言語活動をしているのです。私はこの短期的な記憶のメカニズムを理解することで、人がどのように母語を獲得するのか、さらに言語とは何かという根源的な問いを解明したいと考えています。

音声の短期的記憶の研究の歴史は長く、短期的記憶の保持能力が高いほど言語発達が速いということ

がわかっています。ただし多くの研究は音素（母音や子音）に焦点を当てたものです。しかし音素は経験によって確立するものなので（その証拠に日本人は”r”と”l”の違いがわかりません）、乳児や幼児はまだ音素を十分に確立していません。そこで私は音声のもう一つの要素である韻律（アクセントやイントネーション）も言語の活動や獲得に重要な役割を果たしているのではないかと考え、短期的記憶における韻律情報の処理に焦点を当てて研究をしました。その結果、大人では短期的記憶において、韻律情報の一つであるアクセントと音素の情報はある程度独立して処理されていることがわかりました。この新しい知見を国際学会 INTERSPEECH で発表するため助成金を使わせていただきました。学会ではこの分野での有名研究者に興味を持ってもらうことができ、話を聞いてもらう機会を得ました。また言語研究では心理学や言語学だけでなく、工学や音声学など様々なアプローチがあり、その中で自分の研究をどのように位置づけるか、またその有用性をアピールするかを考えるきっかけになりました。そのような貴重な機会を提供して下さった京友会の皆様に深く御礼申し上げます。

白戸 健一郎

今回、私は「満洲電信電話株式会社の放送文化政策とその継承」という題目で京友会から研究助成を受けました。研究対象は、戦前中国東北部（旧「満洲」）で放送事業を実施していた満洲電信電話株式会社（1933-1945年、以下満州電々）であり、主として明らかにしたことは、その放送会社が行った文化政策や対内及び対外宣伝活動、総力戦体制の中での社会的機能でした。この研究の成果としては修士論文「満洲電信電話株式会社の多文化主義的放送文化政策」としてまとめました。満州電々のラジオ放送事業は多民族国家であり新国家でもあった「満洲国」の「神経組織」として位置づけられ、同じ情報を同時に、「声」によって伝達できる特性から「国民統合」メディアとしての機能を期待されました。しかし、多民族国家であったという特性から多言語放送を実施せざるを得ず、さらに、対象となる集団が好む放送番組を提供しなければならなかったことや中継放送への依存構造があったことから、結果的な機能としては、「国民統合」というよりもむしろ「細分化」のメディアとして機能したことを指摘しました。特に、満洲在住の日本人向けの放送では内地中継に極度に依存しており、日本人に対しては遠く離れた地で「故国」への郷愁を呼び起こす「遠隔地ナショナリズム」を喚起したことを指摘しました。

当初の研究計画では、ここからさらに、その経験や知が戦後日本の放送秩序にどのように消化されたのかをも考察しようと考えていましたが、これは先駆的に実施された広告放送（商業放送）が、事業自体は短期間で打ち切られたものの、議論は多くなされ蓄積され、それが戦後の民間放送を好走する段階で輸入されたことを指摘するのにとどまり、次の研究課題として積み残しました。

研究助成金は主として、資料のコピー代や書籍代として利用させていただきました。また、研究成果は2011年6月12日の日本マスコミュニケーション学会(早稲田大学)にて「満洲電信電話株式会社の多文化主義的放送政策」、2011年6月24日の20th Asia Media Information Communication Centreで”Multicultural Broadcasting Policy of the Manchurian Telegraph and Telephone Company”のタイトルで報告しました。

中山 真孝

模倣能力、例えば見た行為をそのまま真似する能力、は一見単純でありながら人間の学びを支えています。本研究では、そのような模倣能力がいかなる認知メカニズムによって実現されているかを実験心理学的手法によって検討しました。本研究では、特に意味記憶によって導かれる行為の意味が模倣を支

えているという仮説を立て検証しました。直観的には、その行為の意味がわからなくても、模倣はできるように思われるかもしれません。実際、そのような立場の研究も多くあります (e.g., Meltzoff & Moore, 1977)。しかし、心理学・神経科学・計算機科学の総合的な知見から、従来考えられてきた以上に、意味記憶が認知・行動を支えていることが明らかになってきています (e.g., Patterson et al. 2007)。議論をふまえ、行為模倣における意味記憶の役割を検討するため、動画呈示される行為を実際に模倣してもらう実験を行い、意味のある行為 (i.e., 道具使用のパントマイム) と無意味な行為の模倣成績を比較した (実験参加への謝礼として図書カードを、実験で得られたデータ (特に動画データ) の整理・分析・保存のためパソコン用ソフト・ハードを購入しました)。主要な結果として意味のある行為の方が、模倣成績が良く、さらに、意味のある行為においても命名しやすい行為の方がそうでない行為よりも成績が良いという結果でした。例えば、電話使用のパントマイムはそれを見て「電話を使う」と命名することは容易ですが、frisbeeを投げるパントマイムは比較的命名しにくいといえます。この命名には意味記憶の利用が不可欠であり、命名しやすさは模倣における意味記憶の利用可能性を反映すると考えられるため、命名しやすさに従って模倣成績が変化することは、行為模倣が意味記憶に支えられていることの重要な証拠となります。なお、本研究の成果は The 9th Tsukuba International Conference on Memory および日本認知心理学会第9回大会にて発表しました。

富松 良介

本研究は、被虐待児の心理支援のために、描画を用いた心理アセスメント・風景構成法 (以下、LMT) の縦断調査を行いました。3年前の調査では、被虐待児群の LMT から自我の発達を査定する「構成型」(絵の描かれ方を7つに類型化した指標) について、顕著な発達の遅れが明らかとなりました。そして今回は LMT の再調査を通して、描画にいかなる変化がみられるか (あるいはみられないか) という点と子どもの心理発達との関係を捉えることを目的としました。

児童養護施設 (大舎制) の小中高校生の被虐待児4名と、比較群として虐待以外の理由で入所中の児童 (以下、養護児童) 6名の、計10名に調査協力を得られました。ただし、予期せぬ施設変更・退所等により前調査時の子どもが急減したため、子どもに関する施設職員からの聴き取り調査も加味しながら、量的分析よりも質的な事例研究を重視しました。

その結果、明らかになったことは、被虐待児の LMT に僅かながらも3年間で「構成型の変化」がみられた点です。たとえば、かつて混沌としていた情景にまとまりが生れたり、物事の全体や先を見通せる力が育まれたりといった変化です。そして興味深いことに、それらの変化は、3年間を通した施設生活への定着・対人関係の回復・情緒発達などとも重なることが、職員の面接調査からも示唆されています。比較群の養護児童の LMT からは、概して年齢相応な自我発達がこの3年間でみとめられ、それと比べると被虐待児は確かに自我発達がゆっくりで、決して「平均的」とは言えません。しかし、従来から「被虐待児は自我発達に障害がある」と、ややもすると決定論のように言われてきた傾向に対し、本研究は「被虐待児の自我に変容可能性がある」ことを示しています。それは一回きりの調査 (横断研究) では捉えきれない、子どもの成長を長きに亘って追う縦断調査であったからこそ導かれた結論と言えます。貴重な助成を頂いた京友会および、研究に快くご協力頂いた施設とその子ども達に、心から感謝申し上げます。

なお本研究は、今秋開催の日本心理臨床学会第30回秋季大会での発表が決定しています。

「森有正：西歐的自我と日本 エリクソンのアイデンティティの観点から」

京都文教大学学長

鑑 幹八郎 先生

私が、大学院を出て、京都大学で助手を3年目、ニューヨークにありますがホワイト研究所(A・ホワイト精神分析所)に留学して、3年トレーニングを受けたのですが、そのときに接したのが、エリクソンでした。また、森有正とも30年ぐらい付き合っていますので、そのお話を聞いていただきたいと思います。

森有正を読むきっかけは、『展望』の1970年11月号掲載の「木々は光を浴びて」という論文でした。初めて読んだとき、こんな文章を書く人って、いったいどんな人だろうと思いました。というのも、哲学者だというのは全然想像がつかず、それほど私にとっては、あまりにも感覚的に美しい感じがしたのです。森さんは1976年にお亡くなりになっていますので、この論文は晩年の考えが少しずつまとまってきた時期のもので、それから、森さんが書いたものを読みました。『バビロンの流れのほとりにて』は、1956年に書かれた中で一番衝撃的な作品だと思います。森さんは東大の仏文哲学で東大の助教授をされた後、第1号のフランスからの奨学金でパリに行き、そのまま27年間おられパリで亡くなりました。結局、日本に帰ってこなくなってしまう不思議な人です。その苦勞について書き始めたのが、この『バビロンの流れのほとりにて』という本で刊行されている14巻の著作集の1巻にあたります。一番最後の著作は、1977年にかかれた『経験と思想』です。

森さんのNHKの対談をみるのですが、このように人の顔を見ず、ずっと下を向いて答えています。非常に特徴的で興味深いですね。それから、森さんはパイプオルガンでバッハを弾くのが趣味で、『思索の源泉としての音楽』という、彼がパイプオルガンを弾いてバッハについて語っているCDもあります。森さんは、ある名曲といわれたものを練習する折、「不確実で、頼りない、水の泡のようなものだ。けれども、一般的な指の練習を毎日続けて、自分の中に一つのメカニズムを組織する。それが肝要だ」と言う、彼の先生の言葉を引き継ぎ、「技法上の修練が困難きわまりないものであるが、この自己克服の問題は、技巧をその習慣化を背後から方向づけるものとして…技巧の修練よりは更に進んだ人間全体を含む組織の問題を提起する」と言います。つまり、ソリッドで、技術というのがきちっと客観的に触れるものがある。そういうものがないと実際に演奏家というのは演奏できないと言うのです。心理療法の技術の問題を考えているときに、気分で人に会うとか、ただ親切で会うとかということでは、実際に面接なんてできない。そうではなくて、どうにかたちで会うかは決まっていますほとんど揺るがないという、非常にある種客観的でソリッドな主観性が必要であると思っていましたので、森さんの言葉に惹かれました。

そして、森さんは徐々にその一番根っこにある「経験」ということに焦点を合わすようになっていきます。これも心理学者のような言葉ではないかなと私は思ったのですが、「自分の感覚の海に浸り、その体験から自分のことばを見つける」といいます。哲学でいうところの「定義」ですね。それから、言葉の普遍性、われわれの共通語というようなことが本来の哲学の営みなの

だと言います。この言葉の普遍性が過去にとらわれてしまっていてできない、色付けた人の判断で問題を考えても、それは自分の判断ではないというのです。ここでも臨床をやる私は納得しました。例えば、森さんがいう「過去への凝縮」は行動のパターンにあたりますが、心理療法の仕事は、今までの行動パターンから解き放つ、自分の持っている、対人関係的にうまくいっていないマイナスの積み重ねの部分で修正していくということですので、森さんはひょっとしたら同じことを言っているのかなと感激しながら論文を読むようになりました。

そして「新しい経験」ということも言います。自分の経験になる、自分の言葉になるということです。新しい言葉を持った真正の自分。真正というのは、日本語に訳しにくく英語では authentic という言葉です。本物かどうかということですが、自分が自分の経験に根差したかたちで自分の言葉を持つ、それを真正な自分といたしました。自分自身を包み込み、動きにくくしているものを全部はぎ取って、本当の自分をずっと積み上げていけばよろしい。そうしたら本物になりますよ。それを本当の自分と言いませんか。それはエリクソンのアイデンティティという言葉でも言えるものなので、私にとっては非常に新鮮で、心理療法の領域ではなく、哲学の領域から説明してくれる人がいるというのがショックでもありました。

結局のところ、森さんが一番言いたいのは、この「経験」という言葉だけでした。一生懸命いろいろな言い方で、経験が大事だということだけを行っている。『経験と思想』という本が出ましたが、森さんなりに行き着いたところに行き着かれたのかなと思いましたが、同時に出発点に戻ってしまったなという感じもしました。私の感じからすると何も生んでいないのですね。『バビロンの流れのほとりにて』は、アイデンティティを模索するという青年期の人たちにとっては、すごくアピールする本で、彼は40歳を過ぎて50歳近くになって、それを一生懸命やったのですが、文章が非常に上手で魅力的でした。

森さんの生い立ちについてですが、森さん自身は、森有礼という、皆さんご存じの日本の初代の文部大臣のお孫さんに当たります。森有礼は、明治維新前に、鹿児島の下級武士の優れた子たちを10人集めてイギリスに送る、その中の一人として、徹底的な西洋化をされて帰ってきます。おばあさんは、岩倉具視の5番目のお嬢さんで、政略結婚で有礼さんと再婚しました。有礼さんも前の奥さんと離婚しての政略結婚でした。結婚して1年8カ月目に、森有礼さんは暗殺されてしまい、その時には森さんのお父さん、身籠っておられましたから、森さんは実際にはお祖父さんを知らないことになります。実は森さんはあまり外に言いませんが、自分の出自を岩倉家の方に繋げ、重要な自分のバックボーンとして大事にしたようです。森さんのお父さんは牧師で、お母さんの妹さんもまた牧師さんと結婚しています。ですので、森さん自身もキリスト教のプロテスタントに囲まれ、お父さんの建てた教会で洗礼を受けていました。ところが、森さんは暁星学園に入れられます。西洋化された一方で、プロテスタントとカトリックという二つが非常に複雑に混ざり込んでしまうのです。プロテスタントとカトリックは、二つの間で大戦争をやったぐらいですから、大変違います。この異なる2つの思想が混在していたのですね。また、森さんの生活ですが、世間体を気にし、後輩の世話を焼く人でした。女性にも優しい。しかし、優しいと少し違い、自分と他者との境界がなかったのだと思います。知り合っただけで下着を買ってきてくれ

と頼んだりするのです。独特ですね。一方で先ほど対談の写真をみていただいたように自閉的なところもあったのですが、「思考と経験」を究めようとしていた一方で生活スタイルは、ほとんどむちゃくちゃでした。無関心さが極端で、東大も辞めたこともそうですし、家族もほったらかしです。本当に大変だったと思います。4年間ぐらいほったらかしで、5年目に奥さんが我慢ならなくなり、森さんを帰国させ離婚するのですが、本当に無関心なのですね。こうした生活のことは日記には書かず、森さんの日記は、思想的展開等個人的なこと以外が書かれているのですから全く独特ですね。オルガンも、バッハ以外弾きませんでしたし。

そして、フランス人が自分の言葉でしゃべる、そのような言葉が自分にないということが非常にショックだったようです。自分は自分の考えがそこでしゃべれないと。それで自分の言葉をしゃべらないといけないということに彼は気付きます。留学する時、自分を西洋化するか、まったく無関心になるか、あるいはまだら模様かこの三つだと思うのですが、森さんは徹底的に自分を西洋化する方向、西洋的自我で自分は生きることを選んでおり、それが苦勞の始まりと思います。だいたい留学で上手にやる人は、まだら模様ですね。大事なものだけを取って帰ってきます。森さんは、一種の強迫があったようです。夏目漱石も同様です。彼の小説は、西洋的自我が日本の中でどう生きるかという葛藤です。そういう点では、森さんも漱石も引き裂かれた人ではなかったというふうに思います。それに対して、もう一つは解離型です。森鷗外は日本では医者ですが、一方で歴史小説を書いています。西洋の葛藤を持ち込まず、完全に二つにわけています。最後には自分の経験に戻り、森林太郎として死ぬのですが、死ぬまで結局解離型で生きたのだと思います。永井荷風も解離型です。森さんの体験と対照的なのは遠藤周作です。おそらく二人は、同じ船でフランスに渡っていますが、遠藤さんはカトリック文学、29歳の学生の時分に行きました。同じ船で、同じ時期に同じフランスで生活していて全然違う。片一方はカトリックで、片一方はプロテスタントです。遠藤さんの葛藤はいろいろな小説の中であります。古狸庵的なユーモア文章は、やや解離的なレベルもありますが、深刻な小説もたくさんあります。葛藤型と解離型まだらの感じがします。

一方で、西田幾多郎さん、『善の研究』以降、オリジナルな西田哲学を作り上げていかれたのですが、割と早くからドイツやフランスの哲学を読んでおられたのですが、西洋経験がありません。ずっと禅をやられて、相国寺や仁和寺でずっと座っているわけです。西田先生の発想の根源は禅でそこから全てを照らしていきます。おそらく最初から、森さんの経験という言葉のところから西田先生はスタートされていた。森さんは、一番最後に経験にたどり着きますからその差があるのではないかという感じがしています。森さんは日本とフランスを対比的にして、いかに日本は難しい状況かと。それをフランス的にもう1回つくり上げないといけないという、非常にミッション的になってしまったと私には見えます。それでおそらく日本に帰ってきての講演は、オーティスティックな話をします。思想の前パートとして経験、名前のない世界に触れることです。直に自分が初めて出会うというかたちで、そのものを体験するということです。彼は北海道が好きでしたが、名前のない荒涼としたところを見ると、安心したのではないかと思います。京都はあまり好きではなかったかもしれませぬ。歴史的に千300年、昔から名前が張り付いているわ

けですから、それ以外で、新しいものを自分で体験することは非常にしにくいですからね。その点、西田さんの「純粹経験」という、一番根っこのところに自分を置くということに、ちょっと似ているなという気がします。

また、そこから徐々に彼が比較文化的になってくるのは、西洋の場合は自分と他者との間にしっかりと境目があるのだけど、日本の場合境目が無いということを言い始めます。彼の裏側では、先ほど言いましたように結婚生活が破綻したり、東大を捨てたり。また食欲もすごくてひと晩に三つパーティーに招待され、全部行って、出されたものを全部食べたという噂があるほどでした。さらに、若い人たちに、あの先生には何か贈り物を持って行って、ちゃんとやりなさいというようなことを一生懸命アドバイスもします。森さんの周りには、東大仏文のたくさんの人たちが取り囲みます。教え子の伊藤勝彦さんは、新書『生きることと考えること』という森さんとの対談の質問役になっていますし、二宮政之さんは、森さんの死後、筑摩から5冊エッセイ集を編集しました。また、周りには、多くの女性もいました。栃折久美子さんは、装丁家でね。森さんとは結婚というところまで行きそうになるのですが、森さんは申し込まず（妙な申し込みをするのですが）結局は結婚しません。また、D・Dという人は森さんの秘書のような人でしたが（この人にも森さんは妙な結婚の申し込み方をして結局断られます）森さんの最期に立ち会った人でした。妹の関谷綾子さんは、森さんについて本を2冊出版しておられますが、お兄さんをすごく理想化されていましたね。このように見ていきますと志向・思考、頭感覚、脳レベルでは森さんはすごく西洋的なのですが、行動的なレベルでは、非常に日本的でした。原理的に考えると合わない、二つの正反対の文化をなんとか一緒にしようとして、結局は引き裂かれてしまったのです。

この点について私はずっと興味があって、アモルファス自我というかたちでこれを表そうと書きました。西洋的というのは強固な自分というのがあります。森さんが最後に言いたかった自分の言葉でしゃべれとは、まさにこの中核的自我を強め、そこからものを言えということです。ところが日本の場合、中核的自我なんてないですから、ほとんどそれは無理でしょうということになります。対人関係的に言うと、西欧的なら一人一人があつて、対等にももの言つて、その場は、存在しますけれども、ほとんど意味はなさず、個人対個人という関係ですが、日本の場合は、この場がすごく大事です。われわれは相手の中に深く侵入して話を合わせます。一番典型的なのは敬語ですね。3人になった場合に、先輩と後輩がいたらすごく困ります。こちらには敬語を使い、こちらには、後輩の言葉を使わなければいけない。どこでも、われわれは場によって言葉を選んでいるのです。しかし、同僚と話すか、年の若い人と話すか、年上に話すか、全部違うでしょう。言葉は違います。ところが、西洋では言葉は一つしかありません。だから、これが一番問題なのですね。森さんは、そういうものを全て取っ払えと言っているのですが、実際に自分は全然取っ払っていないのです。言っているけど、やっていない。森さんは、二項関係といいます。私が相手の中にある私に向かって話すということなのですが、私が年下の人の場合、ここに私が年下として存在しているから、年下語を使わないとこの場が持たない。つまり、私の投影に向かって話をするわけです。年配として私を置いているのなら、年配として私は話す、そのように話さないと、この場が成立しないと森さんは「二項関係」という形でいいました。そうすることで、

自分の経験になると考えていたのです。実際非常に頑張ってそれをしたのですが、結局、経験と
いうことを彼は発見して、そこで終わってしまったのが残念です。

思うに、自分一人で、意志的に自分の経験を意識しようとしても、どうしても限界があります。
心理学でいう自己分析ですね。どうしても自分に甘いところがあり、分析しきれず残ってしまう
ところがあります。またもっと本質的な面では、自分というふうに自分が思っているところの中
に何かほかの刺激が入っても、その刺激を選択的により分けて、プラスのものは取るけれど、マ
イナスのものは入れない、そういう選択的非注意を、いつの間にかわれわれは操作的にやってし
まいます。そうすると、それで自分を保っていて新しいものを学習できないわけですね。年を取
れば取るほどそうなる。変わりようがないわけです。ところが森さんが言うのは、それを全部捨
てて、一番真正なところからスタートしろと言いますから、それはもうできない相談だと言っ
てもいいような厳しい言葉だと思います。ですから、自己観察するときに、どうしても他人がそこ
に入ってくる。それがサイコセラピーのとても重要な基本的構造で、他者が入ることによって内
的世界をわれわれはようやく変化させていく、努力する場が提供できるということだと思います。
自分を中心に真正に生きるということと、世間体を体得して調和的にうまく日本の中で生きてい
ること。この二つを本当に統合することは不可能なのかということだと思います。もしかしたら可能か
もしれないけれども、われわれのどこかで解離的な要素、分かっているけど切り離してしまう、そ
ういう要素が要るかもしれないと思います。というところで、私の話を終わらせていただきます。
ありがとうございました。